

夢に挑戦する相産づくりを目指して

○8月4日(水)「相生市人権のつどい」があった時に、「澄んだ瞳」第49号(相生市教育委員会発行)が配布されました。その中の中学1年生の作文に心打たれました。市教委の了解を得て掲載します。

「僕のお父さん」

＜神戸の風景；ハーバーランド側より＞

「僕のお父さんは右足がありません。小さい時に船に乗っていてなくなったそうです。だから今は義足をしています。お父さんは小学校や中学校の運動会はずっと見ていただけだったそうです。それに部活動やいろいろな活動もできなかったそうです。きっとお父さんはつらかったらうなと思います。僕は普通に走ったりすることができますが、お父さんのように体が不自由な人はそれが当たり前ではないのです。

でも、お父さんは、料理をするのがとても上手です。僕はお父さんの料理の中で一番好きなのは、たこ焼きとコロッケです。お父さんはキャッチボールやノックもしてくれます。

走ったりすることはできないけど、自分にできることは何でもしてくれるのでとてもうれしいです。

僕の夢は、お父さんのようなおいしい物を作る料理人になることです。

お父さんは足が不自由だけど、とってもいい人です。怒るとものすごく怖いけど、普段はやさしいお父さんが僕は大好きです。僕もそんなすばらしい大人になれたらいいなと思っています。」

私はこの作文を読んで童謡詩人；金子みすゞさんの2つの詩を思い出しました。3年前に山口県長門市仙崎にある金子みすゞ記念館に行きました。その時、買ってきた『みすゞコスモスーわが内なる宇宙』（矢崎節夫著）にある詩です。

「星とたんぽぽ」

青いお空の底ふかく、
海の小石のそのように、
夜が来るまで沈んでる、
昼のお星はめにみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。

「私と小鳥と鈴と」

私は両手を広げても、
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面（じべた）を速くは走れない。

私がかからだをゆすっても、



散ってすがれたたんぽぽの、
瓦のすきに、だまあって、
春がくるまでかくれている、
つよいその根は眼に見えぬ。
見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。

きれいな音はでないけど、
あの鳴る鈴は私のように
たくさんな唄は知らないよ。
鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

中学生のこの作文には、父親を通して違いを自然と理解している息子の姿が見えます。金子みすゞさんの世界と通じる静かな、心が洗われる作文です。〈神戸国際会議場前の斜面噴水〉



余談になるのですが、このみすゞさんの本の著者である矢崎節夫さんが、26歳で自殺し、幻の童謡詩人と語り継がれていたみすゞさんの散逸した詩を集め、世に問いました。それが没後、50余年経ってからのことです。矢崎さんがいなければ、みすゞさんは一部の人以外に知ることはなかったでしょう。また、小学校の国語の全社の教科書に載り、年間1

20万人以上が訪れる金子みすゞ記念館なんてできこなかったのです。

本の「あとがき」に矢崎さんが「もし、ぼくがみすゞさんに会わなかったら、今のぼくはいなかったでしょう。もし、ぼくがみすゞさんに会わなかったら、自己中心の世界で生きていたでしょう。もし、ぼくがみすゞさんに会わなかったら、生かされていることの倖せに気づかなかったでしょう。もし、ぼくがみすゞさんに会わなかったら、ぼくがぼくであることのうれしさにも気がつかなかったでしょう。もし、ぼくがみすゞさんに会わなかったら、私たちのまわりは、感動するものばかりだと気づくことなく終わっていたでしょう。もし、ぼくがみすゞさんに会わなかったら、今、出会わせていただいたすてきな方々にも、会えることはなかったでしょう。もし、ぼくが、もし、ぼくが……。いくら書き続けても、書きつくせないほど、みすゞさんと出会えてよかったと、心から思っています。」が書かれていました。

3年前の2007年4月30日、みすゞ記念館に家族でおじゃまし、展示を熱心に見させてもらったあと、「みすゞさんの展示文字をもっと大きくしてほしい」と私がお願いし、その時に人感センサー詩

表示の所に案内していただいたのは矢崎さんではなかったのでしょうか？ 尋ねることもしなかったのですが、静かな表情を見てそう思えてなりませんでした。